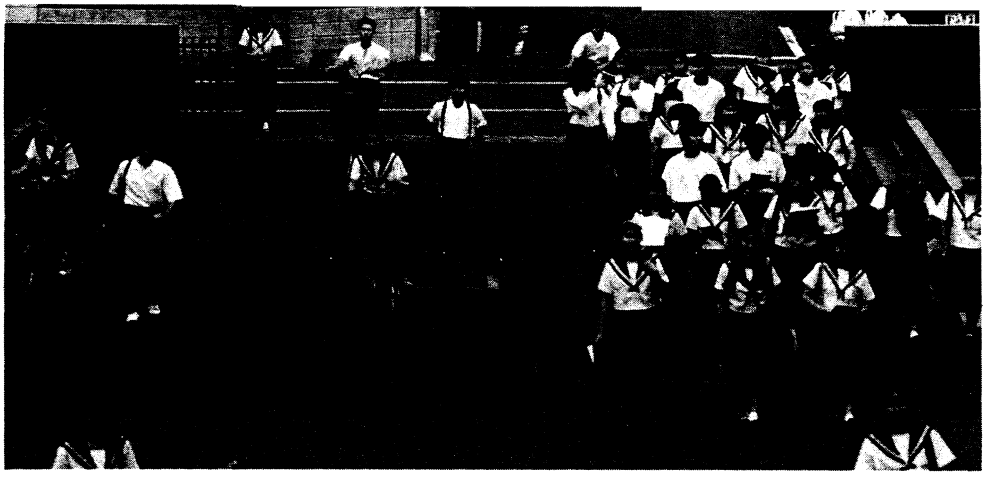

私の西高・30周年に寄す

西高の『自由』

日本松　索　先生

二十四年お世話になった西校を最後に定年退職しました。私は西高の真の命はその『自由』にあると今でも思っています。

自由とは他から押しつけられるのではなく、自らの意志で、自分の内からわきあがる思いで、自分の責任で生きて行く事を言うのだと思います。だから楽ではありません。大変なことです。教師にとっても生徒にとっても厳しく苦しいことです。「自由尊重」。「自主性尊重」。言うは易く行うは非常に困難な事ですが、それを、その困難を大事にしてきたのが西校だったという思いです。また、西校ほど校則のゆるやかな高校は他には知りません。

そして、この『自由』を支えているのが『信頼関係』です。教師・生徒ともにお互いを信頼し、尊重し合ってこそ『自由』は保たれてきたのです。この素晴らしい校風がいつまでもいつまでも続くことを願って止みません。

在任中はいろんなことを言いました。

「掃除をやれば大学に受かる」「青春は『さわやか』でさえあればいい」「ドジは許せるがコスイ奴は許せん」「初めは『お願いします』済んだら『有り難うございます』に決まっとる」……。

勝手な事ばかり言っていた私は素晴らしい生徒諸君に支えられてきました。素晴らしい先生方に教えて戴きました。

まだまだやり残した事が一杯で思いは残りますが、この素晴らしい西校で務められた事を感謝しております。有り難うございました。

（昭和44年から24年間教鞭をとっていただき、この春ご退職となられました。）

ありがとうございました

中村義人　先生

十年間の西高での生活でした。十年前西校にやってきての最初の担任は三年生。黒板の前に立って話しを始める時の緊張と締めつけられるような胸の高鳴りを今でも思いだします。『今度来タノハ、ドンナ奴ヤ?』こちらを見る目という目が厳しくて挑戦的だった（ヨウニ見エタ）つけ。あの頃の三年生コワカッタナー!

新設二校で十一年間過ごして来た自分にとって生徒達の過剰なまでの情熱と自信に溢れた姿は新鮮だった。行事で見かねて指示すると必ずこう言われた。

「先生はだまって!見とって下さい。」

それでも口を出したのは私の若さ故か、あるいは生粋のでしゃばり好きの故か?

それから十年、多くの先生方の努力と生徒自身の頑張りで、あらゆる面に渉って充実、変貌していくその時に、この西高で過ごせたことを幸せに思う。

絵を画く時、自分の好きな画家の絵を模写せよと言われる。模写を通じて、その画家の物を見る目とそのねらいを掴むのである。これは何十枚も一人で練習することよりも効果がある。思えば日本松先生を始め数えきれないほど多くの先生方の模写をさせていただいた。常に生徒と共に有り。心の躍動を伝え、それを越える生徒の情熱のたぎりを受けとめて、共に成長していく。これらを体で学ばせてもらった思いがする。また心をゆらし続けてくれた沢山の生徒皆さんに感謝している。「先人を求めず。先人の求めしものを求めよ。」この西高でこそ生き続けている言葉だと今もかみしめている。

（昭和58年より10年間教鞭をとっていただき、この春、県教育サービスセンターへご栄転となられました。）

俺の人生　これでいいのか!!

4回生　中島正彦

知人のK氏が大学に合格した。K氏は芝居のプロデューサーをしており、年は確か45歳、2人いや3人の子どもがいたはずだ。受験勉強をしていたとは知らなかった。不思議に思い尋ねたところ「真剣に法律を勉強したい」という。

近頃の大学には、一芸を秀でた者であれば社会人であっても面接と論文だけで入学させる制度があるらしい。K氏はその恩恵